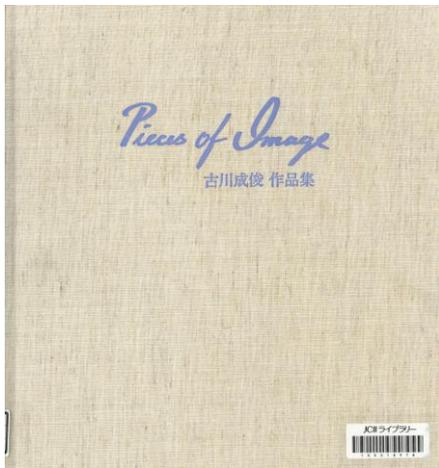


写真人とその本 45 /古川成俊

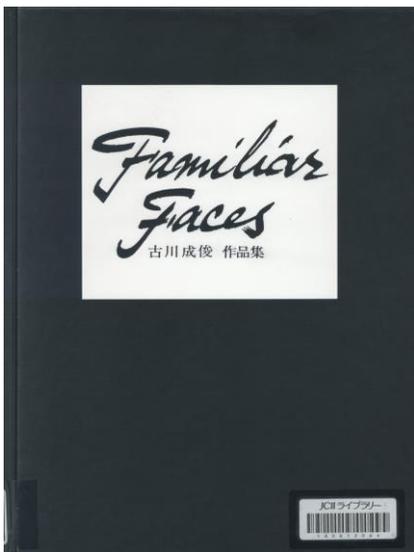
日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

ふるかわなるとし

古川成俊（1900-1996）は、佐賀県唐津で病院を開業する家に生まれ、写真館を運営していた本家を継ぐため旧制中学卒業の直前に養嗣子となりました。成俊の祖父にあたる古川俊平は、福岡（筑前）藩士として薬学を学んでいましたが、西洋の先端技術に深い関心を寄せていた藩士黒田長溥の命により長崎へ派遣され、1856（安政3）年から写真術の調査研究に携わりました。日本写真史の先駆者として知られる上野彦馬とともに外国人写真家から撮影技法を学び、1860（安政7・万延元）年には湿板写真の撮影に成功したとされます。しかしながら、藩士という立場上、俊平の写真術研究は藩の事業活動に留まり、独立して写真館を開業したのは廃藩置県から時を経た1875（明治8）年のことでした。



『Pieces of Image』



『Familiar Faces』

1919年に佐賀県立唐津中学校を卒業した成俊は、当時唯一の写真技術高等教育機関であった東京美術学校（現：東京芸術大学）臨時写真科に進みます。1922年に卒業し、写真館を継ぐため九州に戻りましたが、程なくしてオリエンタル写真工業の技師長・菊地東陽が自社製品の拡販行脚に訪れた際、実演会場としてスタジオと暗室を提供し、自らは助手をつとめることになりました。米国での生活が長かった菊地は撮影指示に英語を多用し、その内容を理解して的確に動くことのできた成俊は菊地に気に入られてそのまま同社に入り写真技術部に配属されました。また、同社が設置した写真教育機関「オリエンタル写真学校」においても「商業写真」と「整色写真撮影術」の講義を担当し、同社が発行した写真雑誌『フォトタイムス』にフォトモンタージュなどに関する記事や作品を寄稿して、「新興写真」の拠点となる同誌で技術啓蒙につとめました。

1955年の同社定年後は嘱託を経て、1958年に東京写真短期大学（現：東京工芸大学）専任講師に就任しました。1962年には教授となり、1976年まで在職します。同年に発行された『特殊写真処理の実際』（写真工業出版社）には、カープロ写真法、アルフォト、ミラーフォトに関するの記事を寄せています。また作品集として、1984年に『Pieces of Image』、翌年に『Familiar Faces』をまとめています。

日本写真協会（PSJ）は、1981年から写真文化に貢献した先駆者たちの記録を残すインタビューを行いました。成俊もこれに応じ、同会月報『PHOTOGRAPHY IN JAPAN』1984年11～12月号には俊平から三代にわたる写真活動の証言が掲載されました。本内容は1997年に発行された東京都写真美術館叢書『日本写真史への証言』（上巻）に収録されています。